

女を求める新たなアラガミの出現...

それは悪夢の始まりだった...

ゴ○ドイーターヒロイン 異種姦作品

アナグラの女たち

DEEPRISING





CAUTION!

未成年の方の購入・閲覧を禁止します！

CG集に含まれる画像の無断転載・
加工を禁止します！

アナグラの女たち

ゴドイーター異種番作品



序章

アナグラの女たち

西暦2071年…

人類は絶滅の危機へと陥っていた

あらゆるものを捕食する「オラクル細胞」の発見…

それは人類にとって全く未知の存在であった
多くの科学者たちがその存在に驚愕したが
同時にその細胞を知り有効的に利用しようと様々な研究に着手した
医薬品から兵器まで…様々な研究者たちが「オラクル細胞」に魅了された
だが、その細胞は人類の想像を超えた進化を遂げることになる
南極で発見された未知の生命体…
人々はその脅威を理解しないまま、捕獲し大都市へと研究の為に輸送した

しかし、大都市に輸送した途端、
その生命体はあらゆるものを食らい出し
僅かな時間で増殖…繁殖を始めてしまったのだった
その生物が「オラクル細胞」で構成されていることをようやく理解した
人間たちであったが…時は既に遅かった…
後に「アラガミ」と名付けられるその生命体は
都市のあらゆるもの…

ビルから車…さらに人間まで全てを喰らいつくしていった
ようやくその脅威を理解し、反撃を開始した人類であったが
人類が保有している銃火器ではアラガミに僅かなダメージすら
与えられなかった…

アラガミは捕食した対象の特徴を宿し変異する性質がある…
人類が強力な兵器を動員すればアラガミはそれを捕食し
より強力な特徴を持ったアラガミへと成長する…
数々の大都市がアラガミにより滅ぼされ人類の人口は一気に激減した
もはや希望すら持てなくなった人類…
だが、そんな時…
人類をアラガミの驚異から守る救世主「ゴッドイーター」が誕生する

アナグラの女たち

遺伝子工学を研究していた企業「フェンリル」

フェンリルは発見された「オラクル細胞」の研究にも着手し
その弱点を見つけることに成功したのだった

アラガミとはオラクル細胞で構成され生命の形に整形された存在である
そしてその中心には「コア」と呼ばれる核が存在しそれがアラガミの行動
を統制している…人間の脳の役目をしているものである
そのコアを破壊…もしくは摘出することができれば
オラクル細胞は命令系統を失い崩壊しアラガミは活動を停止する
しかし、人間の持つ兵器ではアラガミに対して有効なダメージを与えることなど
できない…
アラガミ体内中心にあるコアまで到達することなど不可能と思えた…

だが

アラガミ同士が互いに喰らい合い共食いする様子を見た研究者は気づいた
オラクル細胞同士ならば互いに傷つけあうことができることに…

その理論から開発された兵器…それは「神機」と名付けられた
アラガミと同様にオラクル細胞で構成された兵器…
剣や銃などを模したそれは一種のアラガミとも言える兵器であった…

しかし、アラガミと同じ性質を持つ神機に通常の間人は触れることはできない
触れてしまえばアラガミ同様に捕食されてしまうからだ
兵器の開発に成功しても、それを扱える人間がいなくなるとは意味が無かった

アナグラの女たち

その問題を解決する為に「偏食因子」と呼ばれる物質が活用されることになる
オラクル細胞内に存在するその物質は「嗜好」を決定づけているものだった
オラクル細胞にも捕食する対象の好み…好き嫌いがあり
神機の嫌う偏食因子を人間に投与することにより捕食されるのを防ぐという
かなり危険が伴う理論であった…

しかし、幾度もの実験を重ね多くの犠牲を出し…実験は成功したのだった
アラガミに対してダメージを与えることができる兵器「神機」と
神機を扱うことができる偏食因子に適合した人間…
「ゴッドイーター」が誕生した…

そして、偏食因子の研究はアラガミに対する防衛にも役立てられることになる
人々がアラガミの危険から身を守ることができる場所として建設されたのが
「ハイヴ」と呼ばれるコロニーであった
周囲をアラガミが捕食しづらいオラクル細胞で構成された防壁で囲まれ
アラガミの侵入を防ぐことができる場所が完成したのだった

これらのアラガミに対する有効的な手段を開発した企業「フェンリル」の名は
一気に世界中へと響きわたることになった
世界中からフェンリルに救いを求める声が届き
多くの人々が集まってきたのだった
フェンリルは押し寄せる難民達に対応するために
世界各地にアラガミ防壁を有するコロニーを設置し
そこに支部となる基地を置きその支配力を強めていった
アラガミに対してようやく有効的な反撃の手段を得た人類…
だが、偏食因子に適合する人間の数は少なく
アラガミとの戦闘により命を落としてしまうゴッドイーターも
後を絶たなかった…
アラガミ防壁も万全の対策とは言えず、アラガミの侵入を許してしまう
ことも多々あった…

人々がフェンリルとゴッドイーターたちに大きな期待を寄せる中…
最前線と呼ばれる極東の地に…一人のゴッドイーターが誕生する



EPISODE 01

アナグラの女たち

EPISODE 01

西暦2071年

アラガミとの戦いにおいて最前線とされる激戦の地…
かつて日本と呼ばれる国があったその場所には
フェンリルの極東支部が置かれ、多くのゴッドイーターが所属
アラガミに怯える人々を守り戦い続けていた

極東の地はアラガミの個体数も非常に多く
未だに未確認のアラガミも多数存在する…
フェンリル極東支部、通称「アナグラ」の防護壁も
アラガミの襲撃により崩壊しその侵入を許してしまうこともあった
アラガミと戦うゴッドイーター達の中には激闘の末にその命を落としてしまう
者も多く…
その比率は他の地の支部と比較しても圧倒的に高いのだった…

そんな極東の地に一人のゴッドイーターが新たに誕生した
「神薙ユウ」

対アラガミ兵器である「神機」の新型に適合した最初のゴッドイーターであった
冷静さと大胆さを兼ね備えた彼は
同期である「藤木コウタ」と共にいくつもの戦闘において仲間達を救い
先輩にあたる「雨宮リンドウ」や「橘サクヤ」「ソーマ」といった面々からも
次第に信頼を得るまでに成長していった

そして彼がゴッドイーターとなり数ヶ月が過ぎた頃…

「ねえ、ユウ！ 聞いた？」

「なんのことですか？ サクヤさん。」

コウタと共に任務を終え帰還したユウにサクヤが話しかけた

「ロシア支部からあなたと同じ新型のゴッドイーターが来るらしいわよ。」

「新型ですか…俺と同じ…。」

「しかも…かなり可愛い女の子って噂よ。」

可愛い女の子と聞いたコウタが二人の間にはいってくる

「マジっすか！?? 可愛い女の子って!？」

「ええっ？ ええ、そう聞いたけど…。」

コウタの興奮した様子に思わず後ずさりするサクヤ

「うおお、テンション上がってきたあっ！！」

「……興奮しすぎだぞ、コウタ。」

「なんだよ、ユウ！お前は嬉しくないのか？気になるだろ！？」

「うん…まあ、気になるけど…。」

平静を装ってはいるが、ユウもどこか嬉しそうな表情を浮かべていた
そんな二人を微笑み見つめるサクヤ…

神経を尖らせアラガミと戦う日々を送る彼女にとって

対照的な反応を見せる二人の存在は一つの楽しみにもなっていた

その時、…

アナグラ館内に「リンドウ、サクヤ、ユウ」を招集するアナウンスが流れた

「なにかしら…突然、ユウ行きましょ！」

「はい、サクヤさん！」

「何で俺は呼ばれないんだよお…。」

「任務から帰還して間もないが3人に緊急の要件だ！」

ゴッドイーター達を統括する直属の指揮官「雨宮ツバキ」

リンドウの姉である彼女も元はゴッドイーターであり

その経験から冷静に状況を分析しゴッドイーター達をサポートする

「ずいぶんと突然ですね姉上、少しは休ませてくださいよっ。」

「ここでは上官だ…リンドウ、何度も言ったはずだ！」

「はいはい失礼しました…。」

厳格な姉と比べてどこか抜けているリンドウ…

だがリンドウこそ、この極東のゴッドイーター達の中でも圧倒的な
経験と実力を備え尊敬されるリーダーとも言える人物である

「相変わらず仲が良い姉弟ですね、それで…緊急の要件とは？」

二人とは長い付き合いのサクヤは彼らの扱い方を心得ているようだった

「…話が反れたようだ…、3人にはすぐに出動してもらおう！」

ツバキの話によれば

ロシアから極東へ向かう新型ゴッドイーターを乗せた輸送機が

飛行型のアラガミの襲撃に合い苦戦しているらしい

今は新型のゴッドイーターが善戦しているが機体の損傷もあり

緊急の支援を要請されたのだった

「新型のゴッドイーターは貴重だ、なんとしても輸送機を死守するように！」

ヘリに乗り込んだ3人のゴッドイーターはすぐに輸送機を目指し飛び立った
最前線である極東の地に置いては上空でも安全とは言えず
飛行型のアラガミに襲撃される可能性は高い

この極東の地において安全と呼べる場所はほとんど無い

「どうやら…あれみたいだな。」

リンドウの言葉に身を乗り出すサクヤとユウ

「思った以上に深刻な状況みたいね…。」

「アラガミだらけ…ですね。」

輸送機の周辺には無数のアラガミが群がっていた

そして…

輸送機の上で巨大な神機を振り回す一人の少女が目に入った

「あそこ…一人で戦っているわっ！」

「おお、足場が悪いのに勇敢だねえ。」

「あれが…もうひとりの新型…。」

ヘリの上からでもその華麗に戦う姿がハッキリと見えた

豊満な乳房を揺らし下着が丸見えになりながらも懸命に戦う少女…

「……………」

「ちょっとユウ…何うっとりと見つめているのよっ！」

「あっ…いえ…そのっ！！」

「いや、あれは見とれちゃうだろ……………」

「リンドウまで何言ってるのよ、早く援護するわよっ！！」

ヘリから飛び降りるリンドウとユウ

偏食因子の影響によりゴッドイーター達の肉体は

普通の人間に比べ格段に強化されている

かなりの高さから飛び降りても二人には何の問題もなかった

輸送機の背に飛び乗った二人は少女の元へとアラガミを倒しつつ進む

サクヤはヘリから遠距離型神機で3人を援護する…

「おい…大丈夫かっ！」

『……………。』

「…？」

リンドウの呼びかけに応えることなく無言でアラガミと戦い続ける少女

「おいおい無視かよ…名前は…アリサ…だったっけか？」

「おい、あんた…返事くらいしたらどうなんだっ？」

助けに来たにも関わらず二人をまるで相手にしないアリサ

『話してる暇があったら敵を倒してください…。』

「ずいぶんと…クールだねえ…仕方ない。」

リンドウはその場をアリサとユウに任せ

輸送機内の様子を確認する為に機体内へと向かっていった

アリサの実力はユウから見てもなかなかのモノであった

次々にアラガミを蹴散らしていくその姿は美しくすらある

何よりも目がいってしまうのはその美しく整った顔立ち…

そして豊満な乳房と短いスカート…

サクヤが持つ大人の魅力とはまた違った魅力がアリサにはあった

思わず見とれてしまいそうになるが、

ユウはすぐに任務へと気持ちを切り換え、冷静にアラガミへと対処した

サクヤの的確な援護により、足場が悪い中で十分に力を発揮していた…が

「おいっ…あまり離れるなっ！」

ゴッドイーターとしての経歴ではユウが僅かだが先輩となり

現場での指揮はユウに任せられる…

しかしアリサは自分の意思で判断し勝手な行動を取っていた

「ちょっと…あの子、無茶しすぎよっ！」

上空からその様子を見ていたサクヤも顔色が変わった

『援軍なんて必要ありません、私一人で十分ですっ！』

アリサは決して二人を受け入れようとはしなかった

新型としての絶対的な自信を持ち、ロシアではエリートとして扱われてきた

こともありアリサは他人の意見を聞こうとしない

「見捨てる訳にはいかないわ、ユウ彼女を援護して！」

「わ、わかりましたっ！」

二人はアリサに合わせ行動するしかなかった
上官からも貴重な新型を守るようにと強く言われていたからだ

華麗に戦っていたアリサだったが
やがてその動きにも限界が見え始めていた
弱い個体とはいえ、何百ものアラガミと戦い続け
その顔には疲れが見え始めている

『はぁ…はぁ…はぁ…っ！！』

そんなアリサを守るように戦うユウだったが
一人で守りぬくには限界がある…

そして…

『きゃあああああああっつっ！！！！！！？？？』

「アリサッ！ 大丈夫かっ！！」

アラガミに囲まれたアリサは対応しきれずにその一撃を受け転倒していた

「アリサは私が援護する、ユウはアラガミを近づけないでっ！！」

「了解っ！！」

スコープを覗き、アリサを援護するサクヤだったが…

「な…なにあれ…？」

スコープの先に見えたものは異様な光景であった

アラガミの口から伸びる舌が倒れこむアリサの股間を舐め回していたのだ

『いやっ…何なのコイツ…！！？？』

アリサ自身も何が起きているのか理解できずにいた

激しく自分の股間を舐めまわすアラガミの存在…

それは捕食する為に味見をしているのだろうか…

だが、アラガミの舌はアリサの下着をずらし

秘部に接触し内部へと入り込もうとしてきたのだった

「なんなの…あのアラガミ…新種…！？」

ヘリから援護するサクヤだったが

アリサと密着しているアラガミを狙撃することはできなかった
万が一の場合には輸送機から落下する可能性も考えられた為である

「ユウ…あなたは…絶対にアリサの方を見ちゃダメよっ！！」

「えっ…なんですか突然…！？」

「いいからっ！！！これは命令よっ！！！」

「わ…わかりました…！」

ユウの心は大きく揺れていた…

「一体…背後で何が起きているんだ………！？」

サクヤの慌てぶりからアリサが何らかの危機に瀕している可能性がある…

そして決して見るな！というあの言葉…

アラガミと懸命に戦いながらユウはひとつの結論に達した…

背後ではアリサが半裸で戦っているという答えだ

あれだけ薄着のアリサなら戦闘中に衣服が破けてしまっても不思議はない
おそらく…背後ではおっぱいを丸出しにしたアリサが戦っているのだろう…
年頃のアリサの事を思えばサクヤの「見るな！」という言葉にも強く納得できる

『うああっ…いやあああああああつあつ！！！！！！？？』

「うっ…この悲鳴は………！？」

僅かに聞こえた気がしたアリサの悲鳴…

振り向いてはいけないことは解っていた…

だが、その悲鳴を聞いて振り返らない男など存在しない

ユウはアラガミと戦いながら、さりげなく目の端にアリサの姿を捕らえた…

そこには…



背後から挿入され激しく喘ぐアリサ...

大粒の涙を流し秘部からは大量の潮を吹いていた

もはや頭の中は真っ白となり何も考えることもできないほどに
追い詰められていた

「ああっ...あぐっっ!!!!????」

苦痛に歪んだその表情は、彼女の高圧的な態度とは対照的であった

「た...たすけっ...てっ...ええっ!」

もはや助けを求める声すら出ないアリサ...

アリサの表情は次第に遠くを見つめだしていた

見よ様々というマニガンに弄ばれることわざ受けとれさるわい

「ひああああああああああつ！！！！??？」
再び大量の潮を吹き上げるアリサ…
彼女の目にはもはや光は映っていない…
大粒の涙を流しながら放心するアリサだったが
アラガミの執拗な攻めに体は大きく反応していた

そして…アリサの膣内で大きくアラガミの舌が脈打ち
大量の何かを放出し始めていた
「うあああぁ！！！！?? うあああああああああああああつ！！！！??」
白く濁ったその液体はアリサの秘部から溢れ出し周囲に飛び散っていた
それはまるでアラガミの射精のようにも見えたのだった



その様子を見てしまったサクヤは思わずヘリから飛び降り
アリサの救出へと駆け出していた
同じ女同士のゴッドイーターとして見過ごすことはできなかった
アリサに駆け寄るとサクヤは密着していたアラガミを至近距離から攻撃した

『あっ…ああっ！！！！？？？』
アラガミから解放されたアリサの秘部からは大量の白い液体が溢れ出し
異臭を放っていた
「こ…こんなことって…！？」
まるでアラガミにレイプされたかのようなその様子に息を呑むサクヤ

サクヤは持ってきた毛布でアリサを包み込むと
ユウと共にアリサを守りながら戦い続けた
「悪い、待たせたなっ！！」
「遅いわよリンドウ！！！！」
「ど…どうした…新型の子は…何があった！？」
「大丈夫…生きているわ……それより今は戦ってっ！」
「わ…わかったっ！」
「……………」
サクヤの様子からリンドウも必死にならざるを得なかった
無言のままのユウと共にアラガミたちを撃退していく3人…
そして…

無事に極東支部へと辿り付いた輸送機…そして4人のゴッドイーター

「…一体何があったというのだ！！」

「……………」

サクヤを怒鳴りつける指揮官のツバキ…
だが、サクヤは言葉につまり何も語ろうとはしない…
サクヤの頭の中でも今日起きた出来事が整理しきれていなかったのだ
今まで見せたことのないサクヤの様子に次第にツバキも言葉を失っていた

「一体何が起きたのだ？」

「いえ、俺は機内の様子を見に行ってたもんで…細かいことまでは…。」
状況を見ていないリンドウはツバキの質問に答えられない…

「お前はどうか…すぐ傍にいたんだらう？」

「いえ、俺は自分のことに必死で何も見ていません。」
ユウはツバキの目を見つめるとはっきりとそう答えた…
「そ…そうか…。」

アラガミに襲われるアリサを目撃してしまったユウ…
その強烈な光景を忘れてることなどできない
しかし、ユウは何も見なかったフリを貫く決意を固めていた

自分が命令を無視して見たと話したところで何の意味もない
むしろ見られたとアリサが知ってしまえば、
彼女は大きなショックを受けてしまうだろう…
それにユウにはあの状況を冷静に話せる自信もなかった
目を閉じれば両足を開き潮を吹くアリサの姿が蘇る…

「はぁ…はぁ…はぁ…。」

「おい、おまえ…大丈夫か…？」

「はっ…はいっ！！！！ 俺はだ、大丈夫です！！！！」

「……………」





EPISODE 02

アナグラの女たち

EPISODE 02

「アリサ・イリーニチナ・アミエーラです…よろしく…。」

無事に極東支部へと到着したアリサ
同僚となるゴッドイーター達の前で挨拶をしているが
どこか元気が無いようだった
「うおお、すげえ可愛い！ 俺、コウタ！ よろしく！」
噂以上の美少女の登場にテンションが上がるコウタ
しかし、当のアリサはひどく疲れている様子であった
「……はぁ…。」

「なんだか暗い子だな…おい？ ユウ？」
「ん…あぁ…。」
アリサだけではなく、救出に向かったユウさらにサクヤまで
いつもとは違う様子を見せていたのだった
そんな仲間達の様子を見て心配するコウタだったが、
彼らは何も語ろうとはしなかった…
「一体…何があったんだ…。」

極東支部 アナグラ 診療室

「大変な目にあっただけだね…アリサ。」
診療室でアリサに語りかける中年の男…
「ええ…大車先生…。」
アリサの主治医として同行している「大車ダイゴ」
極東に到着してからのアリサの異変に気づき
その真相を探ろうとしたのだが
アリサ本人はもちろん、
目撃者であるサクヤ、ユウも何も語ろうとしなかった

「何か話したいことはあるかね？」
「いえ…話したくありません…いつもの治療をお願いします…。」

大車はアリサに何錠かの薬を手渡した…
アリサは無言のままその薬を飲み込むと…
ベッドに横になったのだった
「…ゆっくりと休みなさい。」

呆然と天井を見つめるアリサ…
頭の中にはあの輸送機で起きた出来事が鮮明に蘇っていた
突然アラガミに襲われ膣内を掻き回されたあの感覚…
「くっ……………」
アリサは悔しそうに歯を食いしばり怒りを抑えていた
憎きアラガミに弄ばれた忌まわしい記憶は脳に焼きついてしまっていた

だが…
やがて薬の効果が現れはじめるとアリサの表情は穏やかになっていった
うっとりとした表情のまま動くこともなくじっとしているアリサ
「さて、薬が十分に効いてきたようだね…。」

大車はそう言うとベッドの横に座り…アリサの乳房へと手を伸ばした
「……………」

乳房を揉まれ乳頭を弄ばれようともアリサの表情は変わらない
抵抗しないアリサの体へと大車はさらに手を伸ばし
太股を撫で下着の上から秘部を弄んでいた
「うっ…あっ……………」

薬の効果によりアリサは夢の中にいるような気分になっていた
とても居心地が良く辛い過去全てを忘れてることができた

そんなアリサの体を支え起こす大車…
アリサは抵抗することもせずに導かれるままに大車に身を任せる

「さあ、これを口に運んで…。」

アリサの目の前でズボンを下ろし肉棒を露出させる大車
だがアリサは目の前に肉棒をじっと見つめ嫌な顔もせず
肉棒に舌を這わせ口内へと受け入れていった

音を立てて肉棒にしゃぶりつくアリサ…
大車はアリサの頭を抱えて腰を振る…
『んっ…んんっ…！？』
肉棒をすする音が診察室に響いていた
その時…

「おや、先生…いつも大変ですなあ？」
「ああ…あんたたちか…。」

診察室に数人の男達がやってきた
大車とも顔見知りの男達はアリサと共にロシアから来た男達だった
「アリサちゃん、今日も大変だねえ…こんなおっさん相手にして！」
「大車さん、今日は俺たちでいいだろ？」
「あんたいつも楽しんでいるんだから！」

「わ…わかった、だが検査があるから急いでくれ…。」
『……。』

大車は診察室から追い出され
数人の男達に囲まれるアリサ…
だが、薬の影響によりアリサは何の反応も示さない…
男たちは服を脱ぎ捨てるとアリサの顔に肉棒を押し当て
強引に口内へと押し込んでいった

男達の肉棒を次々に口に運ぶアリサ…
激しく音を立ててむしゃぶりつくその姿は
期待される新型のゴッドイーターとはとても思えないものだった
背後から乳房を揉まれようともアリサは少しも動じない…
長年に渡り大車により洗脳され続け

その体を弄ばれ続けてきた結果であった
「本当にアリサちゃんはいいい子だ…。」
「この子がいないロシア支部なんて退屈なだけだからなあ。」
ロシア支部においてもアリサは男達の玩具となり続けてきた

大車の洗脳治療を見逃す代わりに上層部の男達はアリサを求めた



薬の影響によりアリサ自身はそんな忌まわしい記憶など
少しも覚えていないのだが
薬を飲んでしまえば一気に男達の玩具にまで墮落してしまう
ロシア支部の頃から続く、この2重生活は
拓実に来てからも続々と続いている

「よし、アリサちゃん…しっかりと飲み干すんだよ…！」

「こっちもだ、だすぞっ！！」

「んんんっ！！！！？？？」

男達の精液がアリサに向けて射精された…

喉の奥にまで入り込んでくる精液をアリサは喉を鳴らして飲み干していった



1本の肉棒から射精される精液を飲み干すと
すぐに次の肉棒が口内に押し込まれ射精を繰り返す...

二度...三度と射精を受け飲みきれない精液が口内から溢れ出す...
全身が精液に塗れていたが男達はお構いなしに
さらにアリサを弄ぶ...



射精を終えたばかりの男達だったが
アリサを抱え上げると容赦なく肉棒をアリサの膣内へと押し込んでいった

『ううっ…あぁっ…。』
激しく腰を振りアリサの体を突き上げる…

『ひっ…ひぁぁっ…うぁぁっ!!!』
アリサの表情は変わらず呆然としていたが僅かな反応を見せる

「よし…こっちの穴も楽しませてもらうか…！」
『ひぁぁっ…あぐうっ!!!』
男の肉棒がアリサの尻穴に強引に押し込まれていった

本来のアリサならば苦痛に顔を歪め泣き叫び抵抗するだろうが
今のアリサはただ男達に従順であった
夕日に照らされたアリサの体は全身を流れる汗と
秘部からあふれる愛液で輝いていた

豊満な乳房を大きく揺らし男達に身を委ねるアリサ
薬の影響で意識は朦朧としていたが
その瞳からは大粒の涙が溢れ出していた

そして、男達のうめき声と共に大量の精液が
アリサの胎内へと注ぎ込まれたのだった…

『あふっ…ううっ…ひぁぁっ!?!』

膣内で大きく脈打つ肉棒に
アリサの体は反応するように震えていた

全身をガクガクと痙攣させるアリサ
子宮へと流れ込んでくる精液の感覚に全身が支配されていた



「あっ…あぁあっ……!!？」
秘部から肉棒が引き抜かれると
大量の精液が溢れ出す
アリサの口からは唾液が垂れ
土粒の涙とともに流れ落ちる

「ふう、やっぱりアリサちゃん最高だ・・・！」

「くそ、もっと楽しみたいのにな・・・そろそろ時間だぜ・・・。」

この後に予定されているアリサの診断には
極東支部の上官が同席するという話らしい・・・

男達は上官にバレないように

アリサにシャワーを浴びさせ全身に染み付いた精液を洗い流す・・・

全裸で男達に全身を洗われるアリサだったが
未だに薬の影響下にあり、抵抗することはなかった

「新人はここか？大車先生？」

「ええ、ツバキさん・・・こちらです・・・。」

アリサの様子を心配したツバキが彼女の病室を訪れた

『……………。』

「ふむ・・・よく眠っているようだな・・・。」

「ええ、極東まで長旅でしたからね・・・戦闘もありましたし無理もありません。」

「わかった・・・また後で尋ねるとしよう。」

全身を綺麗に洗われ整えられたアリサにツバキは不信感を抱かなかった
「ふう・・・危ない・・・。」

再びアリサのベッドの脇に座りその体へと手を伸ばす大車・・・
乳房を握り締めながら

「さあ、アリサ・・・君にはこれから大きな仕事がまっているんだよ・・・。」

『……………。』





EPISODE 03

アナグラの女たち

EPISODE 03

アリサとロシア支部のメンバーが極東支部へ来て数日が過ぎていた
時間と共に極東の仲間達とも打ち解けていった
ロシア支部のメンバーであったが
アリサは未だにその硬い態度を崩そうとはしていない
ゴッドイーターの先輩にあたるリンドウやサクヤとの会話も固く
任務上必要な最低限の会話しかしないのだった

「ねえ、リンドウ…アリサの事はどう思う？」

「うん？ あのそっけない態度のことか？ 任務に支障はないだろ。」

「そうかもしれないけど…もう少し打ち解けて欲しいと思って…。」

「すぐには無理だろうな…ありゃあ…何か抱え込んでる…」

辛い過去があんだろ。」

「…それだけじゃ…無いかも。」

「なんだ？ 何か知っているのか？」

「い…いえ、それは…。」

「…まあ、女同士にしか気づかない事もあるな…力になってやってくれ。」

サクヤは未だに輸送機上で
アリサがアラガミにレイプされたことを語っていなかった
フェンリルにその事を伝えてしまえば、
アリサの心をさらに傷つけることはもちろん
始めて確認された人間とアラガミとの交尾の貴重な体験者として
フェンリル本部の研究者達が興味を持つことは間違いない…
そうなればアリサは検査続きの監禁生活を送ることになりかねないのだ…

女としてアリサの苦しみが理解できるサクヤは

アリサへの想いやりから誰にも語れなかった…

「大丈夫…あんなアラガミ二度と出てこないわ…あれ一体だけ…。」

サクヤはあのアラガミがたまたま特殊な変異をしたために起きた
最初で最後の出来事だと考えていた…

二度とあんなアラガミは出現しない…そう信じていたが

「さて…全員集まったな。」
指揮官ツバキに招集されたゴッドイーター達…

サクヤ ユウ コウタ アリサ の4人…
彼らに言い渡された任務は普段のものと変わらないものだった
ある地域で大量に確認されたアラガミ「オウガテイル」の討伐…
数は多いとの情報だったがアラガミとしては弱い種類である
二人の新型を含む彼らならば何の問題もないミッションのはずだった…

目的地に向かうヘリの中…
「ずいぶん曇ってきたな…一雨ありそうだ…。」
「ああ……そうだな…。」

予想よりも早く天候が崩れ心配するコウタだったが
コウタの問いかけに薄い反応しか示さないユウ…
アリサの対面に座るユウ…彼はまだあの輸送機の事件以降
アリサとの間には気まずい空気が流れていた…
アリサの顔を見ると…どうしてもあの光景を思い浮かべてしまうのだった…
眉間にシワを寄せ鼻息を荒くするユウ…

「おい、何興奮してんだよ…ってお前ってやつは！！」
「えっ…な、なんだよいきなりっ！？」

アリサの対面にいるユウが
アリサの下着を見つめ興奮していると勘違いしたコウタだった
「すまん…俺の勘違いか…はははっ！」
笑い合うコウタとユウの二人だったが、それでもユウの表情はどこか暗い

そんな二人を見つめていたサクヤはユウの苦しみに気づいていた
(あの子は…あの時アリサの事を見てしまったみたいね…。)
輸送機の上でサクヤの命令通りにアリサを見ないように戦っていた…

だが、限界はある
動き回るアラガミを相手にしている以上…見てしまうのは仕方がない
だが、その事実を サクヤ同様に誰にも話していないユウ…

しかし、秘密にしていることでユウ自身はかなり苦しんでいる様子でもある
このままではアナグラでのアリサとの交流…任務中の連携など
様々な面で支障が出る可能性が高い…

そして当のアリサは…

瞳を閉じ…僅かな間眠りについてた…

普段とは違い穏やかな表情で眠り込むアリサの姿に
思わず見とれるコウタとユウ…だが

「ああああっ！！！？？」

突然アリサは叫び声を上げ目を見開いて目覚めた

「！！？」 「！！？」 「！！？」

汗を流し息を切らしているアリサ…

「…また…あの夢……。」

アリサが見た夢…それは

アリサにとって最悪のトラウマとなっている出来事

昔、自分のちょっとした悪戯心から両親を死なせてしまった…

目の前でアラガミに喰われる両親を見てしまったあの日の記憶…

アリサは頭を抱え込みその記憶に苦しんでいた

(アリサ…やはり苦しんでいるのね…。)

(あんな目に合えば当然だよな…力になりたいけど…。)

(…あんなアリサ初めて見た…。)

サクヤとユウの二人はアラガミに犯された事を苦しんでいると思い込み

コウタはただ呆然としていた

頭を抱え込んだアリサだったが…やがて身を起こすと

バッグの中から何かを取り出し始めた

「これが…ないと……。」

それは大量に用意されていた何かの薬だった

見た目では何の薬か解らなかったが

おそらくは主治医である大車から処方された

精神安定剤のようなものと思われる…

サクヤとユウはそんなアリサに深く心を痛めたが

その薬を飲むアリサの姿を見て啞然とする

飲むという表現よりも喰らうという表現が正しいように

アリサはその薬を何錠も手に取り、一気にバリバリと音を立てて噛み砕いた

「……。」 「……。」 「……。」

3人とも言葉を失いお互いにただ視線を反らし座っていた
アリサの苦しみを勘違いながらも理解しているサクヤとユウに比べ
コウタは多少引きつった表情で固まっていた

そしてヘリは目的地へと到着・・・
ゴッドイーターは任務の為に目的地までヘリで輸送され
任務達成後にヘリの迎えを待つことになる・・・
非常に危険な地域の為にヘリは任務中待機していることができない

ヘリから降り立った4人はいつにも増して気分が沈んでいるように見える
唯一、薬を飲んだアリサの顔だけが爽やかであった
特にコウタのテンションは最悪といった様子でいつもの明るさは無い
「さあ、まずは周辺の搜索よ・・・二人ずつ二組に別れて行動しましょ。」

「……………」

「……………」

無言のままアリサと並んで歩くユウ・・・

非常に気まずい想いがユウの中にはあったが
今は任務中・・・その想いを忘れて速やかに任務を遂行することが大事である

「・・・まずは周辺の地形を把握しよう・・・敵に囲まれるとやっかいだ。」
「……………わかりました、あそこからなら周辺を見渡せそうですね。」

アリサが指差した先に向かう二人・・・
そこからは周辺一体がある程度見渡せた
廃墟となった建物の残骸とその周辺に群がるオウガテイル達・・・
報告通りかなりの数が集結しているように見える

『廃墟の中にもかなりの数がいいるみたいですね。』
「ああ、まずは周辺のアラガミを廃墟を利用しつつ排除していくべきかな……………」

曇っていた空からはやがて大粒の雨が降り始めていた
「予想よりもずっと天気が荒れそうね、早く終わらせて帰るわよ！」
「俺とサクヤさんが援護するから、安心しろよ！」

後方から状況を分析しつつ援護するサクヤとコウタ

『了解！いきます！』

「了解！！」

アリサとユウがオウガテイルと戦い始めた頃には雨は激しく降り始めていた
視界が悪く足元はぬかるみ初めていたが、
新型ならではの応用力で二人は柔軟に敵に対応していく
サクヤ コウタの援護も的確なもので
二人は安心して背後を任せることができていた
輸送機事件以降

アリサとユウの精神的な影響を心配していたサクヤだったが
二人の連携された動きを見てサクヤの心配が一つ減ることになった

『はぁ…はぁ…っ…。』

「サクヤさん、これで…ほとんど片付いたみたいですけど？」

「ええ、、そのようね…フェンリル…、応答願います！」

(……………こちらフェンリル…周辺にオラクル反応はありません
任務達成ですね！)

「やっと終わった…雨も激しくなってきたし早く帰りたいよ！」

(すいませんコウタさん、天候の影響で今はヘリを出せないみたいです…。)

「えええ、そんなぁっ！！？」

「仕方ないわね…みんな雨宿りして待ちましょう。」

アラガミがいなくなった廃墟へと雨を避けて入った4人…

「二人とも…しばらくあっちを向いててくれる？」

『……………。』

「え、なんで…何かいるんすか？」

「コウタ…！」

ユウはコウタを連れ二人から離れた…

「ふう…本当にひどい雨ね…ずぶ濡れよ。」

「…着替えを持ってくればよかったですね…。」

「へえ、アリサ…あなた綺麗な肌してるのね…それに…。」

「な、なんですか??」

「ふふふ…。」

ずぶ濡れとなった服を脱ぎ濡れた服を絞る二人…

「……。」

「……。」

コウタとユウの二人は言われた通りに決して二人の方に視線を向けなかった
そして、会話などせず耳を研ぎ澄まし二人の美女の会話に聞き入っていた

アリサと十分な連携で共闘することができたユウは
少し緊張が解けた様子であった
任務において冷静に行動できた事が自信となっていた
それはアリサも同じであり
態度にこそ出さなかったが
新型同士として僅かだがライバル意識を持つ彼女は
戦場で共闘することに多少の不安があったようだ

しかし、実際には互いに気遣い支え合うことが自然とできており
自分でも気づかないうちに不安が解消したアリサは
その表情と態度にも少し明るさが見え始めているようだった
サクヤとコウタも同様に新人アリサとの任務成功に安堵しているようだ
僅かな雨宿りの時間だったが
4人の会話は以前とは変わって明るく弾んだものになっていた…が

その時…

廃墟全体が大きく揺れるほどの振動が響いた…

「な、なんだ…！？」

その振動は明らかに巨大なアラガミの足音であり
次第に4人のほうへと近づいてきているようだった

「周辺を警戒、敵の正体を探って！！ 見つからないようにね！！」

『了解！』『了解！』『了解！』

壁に開いた隙間から周辺を警戒する4人…

雨は未だに激しく降り続いており視界は悪く遠くまでは見通せない
だが…

やがて雨の向こうから姿を現したアラガミ…

それは…

『……………あいつっ！…あいつはっ！！！！？？』

そのアラガミを見た瞬間…アリサの表情は一変した…

「アリサ…どうした??」

それは、「ディアウス・ピター」と名付けられた
第1種接触禁忌種に指定される個体

第1種接触禁忌種とは

通常のアラガミから派生して進化した個体であり

その凶暴性は通常のアラガミよりもはるかに高い

基本的に希少なアラガミであり目撃情報も少なくその能力は未知数となっている
奴らと戦う為には十分な準備と、上層部からの許可が必要になる…

ロシアで確認された種類であったが、極東での目撃情報は今まで無かった

「そんな…あんな奴見たことないわ…………！」

サクヤは資料でしか確認したことのないアラガミの出現に動揺を隠せない…

「サ…サクヤさん…あのアラガミやばいっすよ…！」

ピターの放つ威圧感に圧倒されるメンバー達…

「ええ…あいつとは戦えない…みんな…今は隠れていて！」

オウガテイルを想定した装備しか準備していない4人では

ピター相手に勝てる可能性はほとんどない…

勇んで挑んだとしても犠牲者が出る可能性は非常に高く

貴重な新型ゴッドイーターに無謀な挑戦をさせることなどできない…

サクヤは戦闘を回避すると共に今後に今今した…だが

『あああつあああつ！！！！？？』

アリサはカバンから薬を再び取り出すと一気にその全てを口に運んだ

「アリサッ、なにする気だっ！！？」

咄嗟にユウはアリサに飛びつき、暴走するアリサを引きとめようとした
その際にアリサの乳房を思い切り握りしめてしまっていたが…

必死になっている二人はそんなこと気にもとめない

アリサはユウを振り切り神機を構え全力でピターの求へと駆け出していった

「サクヤさんっ！！アリサがっ！！」

「アリサっ！？ あの子…何を考えてるのっ！！？」

「サクヤさん！やばいっすよ！！」

「コウタはフェンリルに連絡！ヘリを急がせてっ！！」

「了解です！！！」

アリサは完全に我を忘れてしまっていた

突然目の前に現れた、両親を喰らったピターの登場…

アリサにとって何よりも憎いアラガミであり

決して見逃すことのできない存在だったのだ…

しかし、アリサを一人で戦わせることなど他のメンバーにはできない

アリサを追い駆け出したユウとサクヤ…

コウタは極東支部へと救援を要請する為に残った

一気にピターとの距離を詰め

神機を振り上げピターへと斬りかかるアリサ…



しかし…
アリサの渾身の一撃は空を切ってしまう…
確実に捉えたはずのピターだったが
その動きは想像以上に素早かったのだ
「そんたっしっ？」

そして…

空振りしバランスを崩したアリサにピターの強烈な一撃がお見舞いされた
『きゃあああああああ！！！！？？？』
大きく吹き飛ばされ叩きつけられるアリサ

「アリサ！！」
「アリサッ！！！」

アリサを援護する為にピターに立ち向かうサクヤとユウ…しかし
「か…硬い…攻撃が通らない…っ！？」
今のユウの神機ではピターに十分なダメージを与えることができない
「まずいわっ……アリサを連れて逃げるわよっ！！」

並の神機では僅かなダメージすら与えられない強固なアラガミ…
このまま戦い続けたとしても勝てる見込みはゼロといえる…
しかし…

「があああああっ！！！！」
アリサに続き、ユウもピターの一撃に倒れてしまった
「そんなっ！？」
必死にユウに駆け寄りろうとしたサクヤだったが

「なにっ…こいつら…どこから湧いてきたのっ！？」
サクヤの周囲を取り囲むようにオウガテイルの群れが現れたのだった
サクヤはオウガテイルに集中せざるを得ないのだった…

『絶対に…ピターをっ……！！』
強烈な一撃を受け倒れたアリサは必死に体を起こし
ピターに立ち向かおうとしていた…
だが…

満身に動けないアリサの前にピターは迫る
『……くっ……！？』
神機を振り上げる力も無くなっていたアリサ…
両親と同じピターに殺されることになる己の非力さを悔やんだが…
ピターはアリサを喰らおうとはせず、なぜかじっとアリサを見つめていた

『……な…何……なんのつもりなの？』

状況を飲み込めないアリサ…
すると…

ピターはアリサへと爪を伸ばし両腕を捕らえ宙へと持ち上げたのだった
『うああっ…！！！！??』

空を向いたピターの口の真上へと運ばれたアリサ…
真下にはピターの鋭い牙と口が見える…

これで終わりだとアリサが悟った時…
突然下半身に異常な感覚が走ったのだった
『なっ…なにっ！！！！?????』

アリサの太腿をピターの舌が舐め回していた…
『えっ…なんなのっ…こいつっ!?!』
舌は太股からさらに上へとのぼりアリサの股間へと密着し舐め回した
『ひあああああああっつっ！！！！?????』

ピターを倒すために立ち向かったはずが
捕らえられ体を舐め回されているアリサ…

アリサ自身も何が起きているのか全く理解できず
ただ必死に足をバタつかせ抵抗していた

ピターの舌はアリサの下着をずらし
直に秘部を舐め回し始める

『ひああっ！！！！??いやあああああああっつっ！！！！?????』

「いやあああああああつ!!!!???'」

オウガテイルに囲まれ戦い続けていたサクヤだったが
彼女の神機が遠距離タイプだったこともあり苦戦させられていた
さらにオウガテイルの体に起きていた異変に気づいてしまったサクヤは
大きな悲鳴を上げた

オウガテイルの下半身には明らかに
人間のモノに酷似した生殖器があったのだ
以前のオウガテイルには無かった特徴である・・・
勃起し赤く膨れた肉棒を見たサクヤは大きく動揺していた・・・

その僅かな隙からオウガテイルの攻撃を受け
サクヤは大きく転倒してしまっていた

転倒したサクヤの元には、
当然のようにオウガテイルが肉棒をそり立たせて接近した
「ちょっと・・・嘘でしょ・・・まさかっ!?'」

オウガテイルはサクヤの尻に肉棒を押し当て腰を振るよう動き始めたのだった
「いやあっ・・・やめてっ・・・こんなの入るわけ無いっ!!!!」

必死に抵抗するサクヤだったが偶然にも肉棒が秘部へと密着し強く押されると
「はあああああつ!!!!???'」
その体は敏感に反応してしまうのだった・・・

全身に走る刺激にサクヤの体は硬直してしまっていた
オウガテイルはその隙を逃さず
サクヤの膣内へと肉棒を押し込もうと激しく腰を降った

「いややあああああああああつ!!!!???'」

オウガテイルの肉棒がサクヤの膣内へと挿入されていく

「あっ…体が…熱いっ…なに…なんなのっ！！??」

膣内でオウガテイルの肉棒が熱くなり激しく震えると
大量の精液が一気にサクヤの子宮へと流れ込んでいった

「ひぎっいいいいっ！！????????????????」

「あっ……あぁっ……あがっ……！！」

全身を痙攣させ力なく倒れるサクヤ
彼女の胎内に収まった精液により腹部は大きく膨れ上がっていた
その姿はアナグラで見せていた
華麗で魅力的な

誇り高きゴッドイーターとは程遠い姿となっていた



『うぐっ…あぐうっ!!!????』

ひたすら秘部をピターに舐め回されるアリサ…
その目は完全に遠くを見つめ
もはや意識すら朦朧としている様子だった



ピターの舌はすでにアリサの膣内へと入り込み
その内部を激しくかき回していた

『ひぎあああああああつ！！！！！！？？？』
大量の愛液がアリサの秘部から吹き出し流れ落ちていた
アリサの全身からもついに力が抜け
放心状態となってしまう
最も憎かった相手に弄ばれたアリサのプライドは完全に打ち砕かれてしまった

「うっ…くそっ……気をうしなっていたのかっ…！」

アリサを助けようと無茶をしたユウはピターの一撃により意識を失っていた
「そうだ…アリサ…みんなは…！？」
ユウが身を越し周囲を見渡すと…

「あ…あれは……！！？？」
ユウが目撃したのは…
ディアウス・ピターに捕まり、股間を舐め回され喘ぐアリサの姿…

そして…
右手にはオウガテイルに背後から襲われ喘ぐサクヤの姿…

「むううう……！！？？」

視界内で犯される二人の仲間…
ユウには咄嗟にどちらを優先して助けるかの判断ができなかった…

その時…
「おい、ユウ！！二人はどうしたんだっ！！？」

背後から援護に駆けつけてきたコウタ…
「コウタァ！！！！こっちに来るなああ！！！！！！」

そのユウの形相に思わず立ち止まるコウタ
アラガミに犯される姿を他人に見られるなど
二人にとっては耐え難い苦痛のはず…
ユウは二人のプライドを守るために一人で救出へと向かったのだった

ユウはピターに襲われるアリサへと急接近すると
ピターの顔面前に向けてスタングレネードを投げた
どんな強力なアラガミであっても突然の強烈な音と光は防ぐことができない
作戦は見事に決まり目がくらんだピターはアリサを放り出した…

「よしっ！！！」

落下するアリサを受け止めたユウはそのまま走り続け、
オウガテイルに襲われるサクヤの元へと向かっていた
ユウはオウガテイルに向けても同様にスタングレネードを使いその注意を引いた

「はぁ…はぁ…はぁ…っ！！！！！！」

サクヤを襲っていたオウガテイルが驚きサクヤから離れた瞬間を狙い
サクヤを担ぎ上げたユウだったが…

「うっ…おお……これは…厳しい……っ！！」

豪雨の中ぬかるんだ地面を二人肩に抱えて走るのは
ゴッドイーターといえど楽ではなかった
明らかにそのスピードが落ちたユウ…
その時…

「なっ！？」

突然の銃声と共に目の前のオウガテイルが吹き飛んだ
ユウが視線を向けるとコウタが神機を構えて援護射撃をおこなっていた

「良いタイミングだ…コウタ…！！」

二人を救出し終えた後の援護だった為に
二人の犯される姿はコウタに見られずに済んでいた
ユウはコウタの援護を頼りに二人を抱え必死に走り続けていた

そしてその時…

上空へと姿を現した救援のヘリ…

「よし、救援が来た！！急げユウ！！！」

「うおおおおっ！！！！！」

しかし…

スタングレネードの光から持ち直したピターが
コウタとユウめがけて走りだしていた
オウガテイルを踏み潰し一気に迫ってくるピター

「おい、早く乗り込め！！！！！」

着陸したヘリのパイロットも必死であった
ヘリまで到着したユウはアリサとサクヤをヘリの中に放り投げると
急いで自分も乗り込む…

「コウタ！！！」

「今行く！！！！！」

ヘリが飛び上がる直前までコウタは迫るピタに向けて神機を構え続けていた
そして…

ピターの牙が届くギリギリのところまでヘリは上空へと
逃れることができたのだった

「はぁ…はぁ…やったな…相棒っ！」

「あぁ…良い援護だった…ありがとう…。」

アリサとサクヤの二人はヘリの中でぐったりとした様子で倒れ込んでいた
ユウはコウタに気づかれる前に二人に毛布をかけ
破れた衣服から覗いていた乳房や秘部を覆い隠した…

「良い判断だったよな…俺に援護させたのはさ。」

「えっ…？」

「俺に「来るなっ！！」って言ったのはそういうことだろ？」

「あぁ、えっ……………そ、そう…咄嗟の判断だったけど、
うまく行ってよかった…。」

「一瞬迷っちゃったけど、すぐに理解したよ…以心伝心ってやつかな？」

「そよだち…さすがだ」と

極東支部…アナグラ

「それで…第一種接触禁忌種である
ディアウス・ピターと遭遇したことはわかった。」

「はい…。」

「そうです…俺たちもう必死で…。」

「そこでアリサとサクヤの二人に何が起こったのかを聞いているのだ!!!」

「いえ…俺は救援を求めた後で援護に回っていたので…。」

「……お…俺は何も見えていません…ピターの一撃で意識を失ってました。」

あくまで見ていないということを繰り返すユウであった…

その瞳はしっかりとツバキを見つめ強い意志に満ちていた

「……………そうか…今はそれでいい、体を休めるといい、解散だ!」

ツバキはユウが何も語らない理由を察していた
女としての感とゴッドイーターとしての経験からだった…

病室で寝込むアリサとサクヤを見て

通常のアラガミとの戦闘で負う傷ではないとすぐに理解したのだ

そして、怯え何も語ろうとしないサクヤと

二人を守ろうとするが故に語らないユウ…

それぞれの想いは強く理解していたツバキだったが

指揮官として新種のアラガミの登場を黙って見過ごすことなどできない

その攻撃に対処するためにできるだけ情報が必要なのだった

ツバキは全てを見たであろうユウを私室へと呼び出し

全てを話すように彼へと話しかけた

「…俺は何も…。」

「見ていないというのか…?」

「はい…………。」

「お前が二人を守ろうとしていることは解っている…。」

「…………。」

「だが、アラガミが新たな進化を遂げたのであれば…

これは大きな驚異となる…。」

ツバキはこれからの戦いの為に、他のゴッドイーターたちを守るために

全てを話すように言った…

それが多くの仲間を救うことにもなるということだと…

アナグラ…診察室…

「アリサ…また何か大変な目にあったようだね…？」

『ええ、大車先生…もう全てを忘れたぐらいです…。』

「だが、薬を飲みすぎたのは感心しないな…。」

『すみません、私もそんなつもりじゃなかったんですけど…。』

突然、両親の敵であるピターと遭遇するなど想像もできなかった
『今日も…治療をお願いしますか…？』

「ああ、いいとも…任せなさい…。」

大車はアリサに何錠かの錠剤を手渡す…
アリサはそれを飲み込むと…リラックスした様子となり
全身から力が抜け、目は虚ろとなっていた…

「さあ、はじめるとしようか…。」

薄暗い部屋でモニターをじっと見つめるアリサ…

「さあ、アリサ…これが君のご両親を殺した奴だよ…。」

『……………。』

「それだけじゃない…君を犯し…その体を弄んだ相手なんだ…。」

『わ…私の体…を…。』



大車に肉棒を押し込まれながらアリサはモニターを見つめていた
『ああ…いや…やめて……中に出さないで…。』
アリサが見つめるモニター…そこに写っている人物とは…



EPISODE 04

アナグラの女たち

EPISODE 04

「つまり…アラガミが人間を交尾対象として認識し始めたということ…かな。」

「確認された事例は3度だけですが…。」

極東支部におけるアラガミ研究の第一人者…「ペイラー・サカキ」博士
風変わりな人物ではあるが
その発想力と想像力はフェニル本部からも注目されており
あらゆる視点から人類生存の可能性を模索している人物

ゴッドイーターの女性がアラガミにレイプされたという事実を知ったツバキ
しかし、ユウがこの問題を誰にも話すことができなかったように

ツバキにとっても重すぎる問題であった
極東支部支部長である「ヨハネス・フォン・シックザール」に
相談することも考えたツバキだったが
アラガミと戦う為、人類を守るためにはどんな犠牲もいとわない性格である

シックザールに話してしまえば
間違いなくこの特殊な事例に興味を持ち
アリサとサクヤを隅々まで研究…利用しようとするだろう…
部下である二人をそんな目に合わせるなどできないツバキだった

そこでツバキはシックザールとは古い付き合いがありつつも
現在はシックザールと距離を置き
アラガミを研究しているサカキ博士に相談したのだった

「それは…由々しき事態だね…興味深い事には変わりはないが。」

「サカキ博士…二人に何かするつもりでは…？」

「安心したまえ、そのつもりはない…。」

サカキ博士はぶつぶつと独り言を言いながら独自の見解で状況を分析したアラガミが何かの影響により生物の繁殖行動を模倣し始めた・・・
そしてゴッドイーター体内にある偏食因子が何か関係しているのではないかと様々な観点から意見を述べていた

「襲われたことにより彼女たちに何か影響があるのでしょうか・・・？」

「君が恐れていることはわかる・・・だがその心配は無さそうだ。」
ツバキは二人がアラガミにレイプされその体液を注入されたことを心配した

「二人のサンプルを分析してみたが肉体的な影響は全く無さそうだ。」

「そうですか・・・それを聞いて安心しました。」

サカキ博士の分析によると、二人の体は健康を十分に保っていた

偏食因子の影響によりゴッドイーター達は並外れた体力と回復力を備える為肉体的なダメージはすぐに回復するのであった
ツバキが最も恐れた二人のアラガミ化という事態も心配いらぬようだし、精神的に受けたダメージはおそらく想像以上であろうと語った

「やはり・・・精神的に追い詰められているようですね・・・特にサクヤが。」

「無理もないだろう、しばらくの間は休ませてあげたほうがいい。」

この事態に対してサカキ博士は見事な対応を見せてくれた
アリサとサクヤを不安にさせない程度に検査を行い分析・・・
さらに二人を休ませる為に、
整備部の「リッカ」を説得し全員の神機を緊急点検すると発表・・・
ゴッドイーター達の極東支部外での任務を事実上中止にしたのだった

異例の事態であったが、博士は巧みに上層部を説得させた・・・

もちろん、被害者をこれ以上増やしたくないという思惑も含まれていた

その翌日…

「興味深い…実に興味深い…！」

「サカキ博士…？」

ツバキが博士の研究室を訪れると博士はいつものように独り言を話していた

「ああ、ツバキ君…君には話しておいたほうがいいね。」

サカキ博士の話によれば

以前に支部に所属していた「元ゴッドイーター」の女性が
調査で支部外に出た際にアラガミにレイプされかけたという情報だった

「その女性は…無事なんですか！？」

「心配いらない、同行していたゴッドイーターが危ういところで助けたよ。」

「よかった…。」

「しかし、これで1つの事実が判明したね。」

アラガミが襲うのは偏食因子を持つ女性に限られるということ…

元ゴッドイーターの女性の傍には数人の女性がいたが

アラガミの狙いは常に元ゴッドイーターの女性に絞られていたこと…

そして、男性のゴッドイーターも現場に数人いたが

彼らにも全く興味を示さなかったこと…

「つまり…襲われるのは女性ゴッドイーター…だけだと。」

「そういうことになる…。」

ツバキの顔は深刻な表情を浮かべていた

極東支部維持の為にゴッドイーターの存在は欠かせない…

だが女性のゴッドイーターを任務に出せば被害が拡大するばかりである

「しばらくは彼女達の任務を控えるしかありませんね…。」

「うむ、私は何が原因で彼女達が襲われるのかを分析するでしょう。」

「お願いします…。」

そのころ…

「はぁ……………」

「はぁ……………」

アナグラに残された女性ゴッドイーター達…
中でもアリサとサクヤのテンションは低かった

「どうしたんですか…二人共？」

そんな二人に無邪気に話しかけるのは「台場カノン」
アリサの先輩ゴッドイーターであり将来を期待されている人物らしいが
任務では非常に誤射が多くトラブルメーカー的な存在でもある

「無理もないわ…私たちだけ置き去りなんてね…早く撃ちたいわ……………」
銀髪をなびかせるクールな美女…「ジーナ・ディキンソン」
極東支部 防衛班に所属するゴッドイーター
任務は主に極東支部の防衛であるが
アラガミを撃つことに快感を覚えるなど戦いを楽しんでいる人物である

「私は楽しいですよ、こうやってのんびりできるのも久しぶりです！」
笑顔が眩しいカノンだったがジーナとの仲はあまり良くない…

性格の不一致ということもあるが
女性ゴッドイーター達のほとんどが豊満な乳房を誇っており
貧乳のジーナにとっては大きなコンプレックスとなっていた

「あなたはいいわね…気楽で……………」

ジーナも態度では不満さを見せていたが
のんびりと体を休められる時間を少しは楽しんでいるようだった

対してアリサとサクヤの表情は重たい…

サクヤはオウガテイルに弄ばれ、
少なからず快楽を感じてしまった自分を恥じ
アリサは親の敵であるピターと遭遇し我を忘れ無茶をしたせいで
仲間達に迷惑をかけてしまったことを後悔していた
ピターに弄ばれ秘部を舐め回されたことは

「あなたたち…本当に暗いわね…。」
「そうですよ、もっと楽しみましょうよ！！」

女性たちが休んでいる事により
男性ゴッドイーター達は全員が出撃しているのだった
カノンとジーナは気分を変える為に二人を外へと連れ出そうとする

「サクヤさんアリサさん、お散歩に行きましょうよ！」
「カノン…悪いけどそんな気分じゃ…。」
「ほら、新人さんも来なさい…これは命令…。」
「え、ちょっと…ジーナさん…！？」

カノンとジーナに強引に連れ出されたアリサとサクヤ…

極東支部の中心にはアナグラと呼ばれる
フェンリル関係者達が暮らす建物があり
その周囲には一般の人々が暮らす居住区が広がっている
彼らが必要とする生活物資は基本的にフェンリルから配給されるものであり
フェンリルを頼らなくては彼らは生き延びることができない
そんな上下関係からか、
フェンリル職員たちの態度は市民達に対して冷たく高圧的な面が見られる
逆らうことができない市民達だが時に暴動という形で不満が爆発する…

しかし、アラガミと直接戦うゴッドイーターの存在は
市民達にとっては大きな希望の象徴となっており
ゴッドイーター人気は市民達の間で非常に高い…

4人が並んで居住区を歩いているとすぐに市民達の注目を浴び
大勢の人たちが集まってくるのだった

「いつもありがとうございますサクヤさん…！」
「ジーナさん、感謝しています！！」
「カノンさんアリサさん、がんばってくださいね！！」

老若男女問わず…多くの人々が彼女たちを頼っていた

「忘れてたわ…私たちってこんな大勢の人たちの力になっているのね…。」

『そうですね…私も…もっと強くなないと…。』

守るべき人々との交流によりアリサとサクヤの顔には明るさが戻っていた
そんな二人の様子を見て安堵の表情を浮かべるカノンとジーナ

しかし、その時…
極東支部全体に鳴り響くサイレン…
そして悲鳴を上げる人々

「このサイレンは…アラガミの襲撃…！！」
「大変ですよ！ゴッドイーターはみんな出払ってるはずです！」
「私たちがいる…アナグラに戻るわよ…！」
『急ぎましょうっ！！』

居住区を走りアナグラへと急ぐ4人…
だが市民達は怯え混乱している様子だった

「カノン、ジーナの二人はアナグラへ急いで！
私とアリサは市民を避難所へ誘導するわっ！」
「わ…わかりました！！」
「気をつけて！！」

「行くわよアリサ…！」
『了解しました！』

極東支部内にはアラガミ侵入の際に用意されている避難所が各所にある
アリサとサクヤは人々を誘導し避難所へと向かわせる…

「きゃあっ!!!」

「カノン…どうしたっ!？」

アナグラへと走るジーナだったが、
突然のカノンの悲鳴に振り返る…

「ジーナさんっ…逃げてっ!？」

「そ…そんなっ!」

ジーナの目に入ってきたのはアラガミ「シュウ」に捕まったカノンの姿だった
咄嗟にカノンに駆け寄り助け出そうとするジーナだったが
神機が無くてはゴッドイーターであっても何もできないのだ…

「すぐに…戻るわっ……。」

ジーナはカノンを救う為にもまずは神機が必要であると判断し
アナグラへと走り出していた…しかし
ジーナの行く手を遮るように巨大な影が姿を現したのだった

「な、グボロ…なんでっ…!？」

ジーナを見下ろすように圧倒的な威圧感を放つアラガミ「グボログボロ」
神機もなくまともに戦っては命がない…
ジーナはグボロを裂けアナグラへと向かおうとした…が

「きゃあああっ!!!????」

突然、ジーナの体にグボロの舌が巻き付き
ジーナは一気にグボロの元へと引き寄せられてしまったのだった



その衝撃でジーナの服は大きく引き裂かれてしまい

小振りな乳房が完全に露出してしまっていた

「なっ…やめろっ!!!」

さらにグボロの舌がジーナの体へと絡みつき全身を舐め回してくるのだった

カノンの目はすぐに朦朧とし視点が定まらなくなっていた

何が起きているか理解できず

ひたすら犯され続ける...



「あああっつ…もうダメっ…壊れちゃうっつ…！！??？」
もはやカノンの心は限界に達していた
激しい快楽に襲われ我を忘れそうになっていたのだ

そして…
大量のアラガミの精液がカノンの胎内へと射精されていった
「ひあああああああああつ！！！！??？」



大量の精液によりカノンの腹部はみるみる膨張していった

「あっ…あがっ……あっ……うっ…!？」
全身を痙攣させるカノン…
その姿を目の前で目撃してしまったジーナ…

「カ…カノン…!？」

目の前で起きた光景に思わず息を呑むジーナ
グボログボロの舌で全身を舐め回され
ジーナの体も次第に熱くなりはじめていた

「なっ…体が熱いっ…なぜ…!？」

グボロの攻めに体が勝手に応えているようだった…
そして…

グボロの舌がジーナの秘部へと密着し激しく舐めまわすと
ジーナの表情は一変したのだった

「はぐうううっ!!????」

グボロの舌が膣内へと潜入し奥にまで入り込んできたのだ
ジーナは顔を赤くして激しい攻めを必死に耐えていた…

だが、
その荒々しい舌使いにジーナの意識も朦朧としてきた
全身に感じる激しい快感に耐えられなくなっていたのだ

「ふあああああああああつっ!!!????」

ジーナは激しい悲鳴を上げた
悲鳴と共に大量の潮を吹き出し周囲に撒き散らす…



ジーナの強い意思を持っても
アラガミの執拗な攻めに耐えきることができず負けてしまったのだった
悲鳴を上げた後のジーナはぐったりとした様子で放心し

『今…何か悲鳴が聞こえたような…？』

「えっ…まだ誰か襲われているのかしら…？」

大部分の市民達を避難させたアリサとサクヤ…
カノンとジーナ達は既に神機を手に入れてアラガミに対応しているはずだが
二人には嫌な予感しかしていなかった

『まさか…。』

「やめてよアリサ…あの二人なら無事よ…。」

アリサを励ますサクヤだが、サクヤも心配を隠せないでいた

『私達もアナグラへ戻りましょう…神機さえあればアラガミなんて…。』

「そうね…無線も持っていないし…まずは状況を把握しないとね。」

休暇で外出していた為にアナグラと連絡を取る無線機など
用意していなかった二人…

市民達の避難を終え怪我人の輸送も終えたため

ひとまずアナグラへと戻り準備を整えアラガミに対応することにする…

しかし…

アナグラへと戻る途中で見た光景に
アリサとサクヤは顔を青ざめ絶句してしまう
そこには、アラガミに襲われ喘ぎ声を上げる
カノンとジーナの変わり果てた姿があったのだ

「あはぁっ！！！！？？？」

シュウに捕まり肉棒を突き立てられるカノンと…
グボログボロの舌の上で悶えるジーナの姿…

アラガミ達に弄ばれる二人の姿を
かつての自分に重ねてしまうサクヤと
治療により忘れていた忌まわしいアラガミとの交尾が鮮明に蘇るアリサ

『うっわああああああああっっつ！！！！？？？』

「ア…アリサッ！！??」

豪雨の中…ディアウス・ピターに膣内を舌で掻き回されたあの時…
その記憶が鮮明になった…
アリサは地面へと崩れ落ち涙を流していた…

「アリサ…しっかりしなさい！！」

『あっ…ああっ……。』

アリサはショックにより立つこともできない…
そんなアリサを何とか抱え上げアナグラへと戻ろうとするサクヤだったが

「そ…そんなっ…こんなことって……。」

サクヤの行く手を遮るようにアラガミ「コンゴウ」が姿を現し
さらに背後には「ヴェジュラ」が接近してきていた
絶望するサクヤに一気にコンゴウが飛びかかってきたのだった

「きゃああああああああっっつ！！！！？？？」

倒れこむアリサと

すぐにコンゴウに捕らえられたサクヤ

「いやっ…離してえっつ！！！！？？？」

サクヤは必死に逃れようと暴れていたが
コンゴウはすぐに勃起した肉棒をサクヤの膣内に挿入させようともがく

「そ…そんなっ…こんなの…もう嫌よっ…！！？」

メリメリと音を立てて膣壁を押し広げて肉棒が奥深くへと入り込む…
「あっ…あがっ!!!???

苦痛で歪むサクヤの顔…
さらに肉棒は奥へと挿入されていき子宮を大きく押し上げる
「あっ…あぁっ……あっ……!!!???



激しい苦痛を感じると同時に
サクヤは激しい快樂をも感じていた
刺激された秘部からは大量の潮を吹き出し続けていた…
コンゴウはその巨体でサクヤを抱え、
激しく腰を降りサクヤとの交尾を開始した…

「あっ…ああっ…いやああああっつっ！！！！？？？」

「サクヤ…さん…っ…。」

倒れ込んだアリサはサクヤの姿をじっと見ていたが
未だにショックから立ち直れていなかった…
尻を突き出したまま必死にもがくアリサだったが
その背後からはヴェジュラが迫っていた…
ディアウス・ピターの基本種であるヴェジュラもアリサにとっては
最も嫌うアラガミの一種であった…

「あ、ああ…助けてっ…パパ…ママ…っ…………。」

背後から迫るヴェジュラに気づき膨れた肉棒を目にしたアリサは
激しく動揺し怯え逃げようと必死だった

しかし、
アリサはすぐにヴェジュラに追いつかれてしまう…

「ひいっ…いやああっ！！！！？？」

アリサの姿勢はヴェジュラにとって交尾しやすいものだった
ヴェジュラの肉棒はすぐにアリサの秘部に押し付き
強引に膣内へと押し込まれていったのだった

「ひあああああああああああっつっ！！！！？？？？」



ヴェジュラの肉棒は一気に膣内の最新部にまで到達した…
アリサの体はガクガクと震えアラガミとの交尾に恐怖していた

「あっ…いやああっ！！ 許してっ…許してくださいっ！！！」

必死に許しを請うアリサだったがアラガミがそれを理解するはずもなく
激しい腰使いでアリサを攻めるヴェジュラ…
アリサは大粒の涙をながしながら必死に耐えていた

アラガミに破壊された廃墟の中心で泣き叫ぶゴッドイーター達…
既に放心し抵抗する気力すらなくなっているカノンとジーナ…
そして少女のように泣きじゃくるアリサ…
その顔は涙と唾液でぐしゃぐしゃになっていた…

しかし…
アリサは自分の体に起きている変化に気づいていなかった
普通ならば激しい攻めに激しい苦痛を感じるはず…

しかし
アリサの体はヴァジュラの肉棒をすんなりと受け入れ
全身に感じているのは苦痛ではなく快樂であった…
精神的には耐えられないほどの苦痛であったが
輸送機での事件やピターに弄ばれた経験からか
アリサの体はヴァジュラの攻めを素直に受け入れるまでに適応していたのだった

『なんでえっ…なんでこんなに気持ち良いのおっ……っ！！！！??』

耐え難いほどに心は苦しんでいるのに
体を感じるのは恐ろしいほどの快樂…
アリサの中では対極する二つの感情が入り混じっていた

「あはぁっ…ひあぁっ…あぁっ…。」

コンゴウにひたすら攻め続けられ既に体力の限界にまで達していたサクヤ…

「ああ、ダメえ…またイクっ…もうダメえええええ……！！！！??」
激しすぎる攻めに何度もイカされ続けたサクヤ…
しかしコンゴウは決してサクヤを離そうとはせず
ひたすらその腰を振り続けていた

しかしついに…

「あああぁぁっ…熱い…体がっ…中に…出てるううっ！！！！??」
大量の精液がサクヤの子宮へと流れ込んだ
サクヤの悲鳴は大きく響き渡り
極東支部全体へ伝わる…



大量の射精を受け入れたサクヤの腹部は大きく精液で満たされ膨らんでいた
そのあまりの快楽にサクヤは完全に放心状態となっていた

「あっ…はぁっ……あっ……。」

その時は自然と遠くを見つめ

『うああうっ…気持ちいい…………。』

アリサの精神も既に限界に達していた
ヴァジュラの激しい腰使いに完全に魅了され
快樂しか感じるができなくなっていた…

今のアリサにとって両親の事やゴッドイーターとしての任務…
全てがどうでもよくなっていた…

今感じている快樂こそが…アリサの全てであったのだ

その口元はうっすらと笑みを浮かべ
ヴァジュラとの交尾を完全に受け入れてしまっている
今にも意識を失いそうに追い詰められているアリサ…

そして…
ヴァジュラの雄叫びと共に
大量の精液がアリサの中へと流れ溢れていったのだった

『ひあああああああああああああああつっつ！！！！????????』

その悲鳴を最後にアリサは完全に意識を失ってしまった…
アラガミの精液に塗れ放心するアリサ…
その隣には仲良く並ぶサクヤの姿もあった…

二人は共に笑っているように見える…

ゴッドイーターとしてのプライド全てが打ち砕かれたのであった…



アナグラの女たち



EPISODE 05

アナグラの女たち

EPISODE 05

女性ゴッドイーターに対する緊急の任務中止命令…
その命令に現場では多くの混乱が生まれていた

「どういうことだっ！！何で女達だけ任務に出られない！？」
『い…いえ、それは私にも解らないんです。』

あらたな種類のアラガミの出現により
女性ゴッドイーターには今までには無い危険が発生した事が原因であったが
フェンリルもそれを公にすることはできない…

市民にまでその噂が広がれば今までに無いパニックが起きる事は想像できる
アラガミにレイブされたゴッドイーター達の名誉も同時に傷つくことになる…

パニックになっているのはゴッドイーター達も同じであり
何人かのゴッドイーター達は情報を求めて
オペレーターである「竹田 ヒバリ」に詰め寄っていた

『はぁ…私の仕事を超えているよ…。』

任務をサポートする際のオペレーターとして絶大な信頼を持っているヒバリ
ゴッドイーター達からも頼りにされており
上層部と面会できないゴッドイーター達はその窓口を兼ねている
ヒバリへと詰め寄ってきたのだった…

「大変だねえ、ヒバリさんも。」
「リッカさん…本当に大変なんですからね…！」
「ごめんごめん！」

ヒバリに語りかけてきた女性は
極東支部の神機を専門とする整備士…「楠 リッカ」

「でもさ、本当に何があったんだろうね…女性だけ待機なんて始めてだよ。」
この異常とも言える事態にリッカも困惑している様子だった

『ええ…女性だけというのが気になりますね…。』
「まあ、考えても仕方ないよね…ヒバリさんはこの後どうするの？」
「私は…特に決めていませんでした…。」

フェンリルで働く多くの職員はゴッドイーターの適性を持った人物が採用される

偏食因子に適合する可能性が非常に高く
適合する偏食因子が発見され神機が確保されれば
すぐさまゴッドイーターとして採用されるのだ…

ヒバリも適合する因子が発見されればいずれはゴッドイーターになる
だからこそゴッドイーター達に起きる事件が他人事のように思えない

「じゃあ、このあと一緒に遊びにいこうよ！」
「ええ、いいですよ！」

偶然にも久しぶりの休暇が重なった二人はアナグラから飛び出し
居住区を散策していた
住み慣れたアナグラには多くの友人やプライベート空間が存在しているが
それでも独特の緊張感があり、時には戦死者も出る…

そんな長くアナグラに閉じこもっていると
精神的に追い込まれ負けてしまいそうになる…
特に若い世代の職員たちは気分転換に外出することも多いようだった

ヒバリとリッカも居住区に暮らす友人たちを訪ね
仕事を忘れ僅かな休暇を満喫する…

亡き父親もフェンリルの技術者であったリッカ…
物心ついた頃から父親の背中を追い
気がつけばフェンリルの整備士として働き始めていた

「ふう、こうやって外に出るのも久しぶりだよ…。」

『本当ですね…ずっと仕事ばかりでしたから。』

地下の整備室に籠もりきりのリッカと
オペレーターとしてミッションのサポートに追われるヒバリ…
ゴッドイーターを支える仕事についている二人は
仕事は違えどどこか想いが通じるところがあった

『あれ…あそこにいるのサクヤさん達じゃないですか？』
「あ、本当だ！ みんな任務に出られないから暇なんだね…。」

特に目的もなくフラフラしている
サクヤ アリサ カノン ジーナ 4人のゴッドイーター達…
自分たちと同じだと…笑い出してしまう二人…

しかし…
突然の警報に二人の顔から笑みが消えた…

『これは…アラガミ襲撃を知らせる警報です！！？』
「そんな…なんでこんな時に…！？」

女性ゴッドイーターが任務待機の影響で
極東支部の男性ゴッドイーター達は完全に出払い
残されているのは防衛班の僅かなゴッドイーターと
4人の女性ゴッドイーターのみであった

すぐにアナグラへと戻りゴッドイーター達をサポートしたい二人だったが
周囲には混乱し怯える人々が大勢いた…

『リッカさん…まずはみんなを避難させないと！』
「わ、わかったっ！！」

フェンリルの職員として市民を守るために避難誘導を行う二人…

『サクヤさん、アリサさん何をしてるんですかっ！？』

市民を誘導していたヒバリの目に
同じように市民を導くサクヤとアリサの姿が入ってきた

「ヒバリちゃん…あなたこそここで何を…！？」
アナグラにいたと思っていたヒバリとリッカの姿に驚くサクヤ

『早くアナグラに戻ってください…ここは私たちが引き受けます！！』
「で…でも…」

サクヤの表情は重かった…
まるで戦うことを恐れているかのようにヒバリには見えたのだった

「サクヤさんの神機は完璧に調整してありますよ！急いでください！」
「ええ…わかった、できるだけすぐに向かうわ…」

サクヤとアリサは市民を避難させた後にすぐにアナグラに戻ると言った…

「サクヤさん…何か悩んでいるみたいだったけど、大丈夫かな…？」

『強い人だから…大丈夫ですよ…。』
女性ゴッドイーターの中でもリーダー格のサクヤの異変…
それは少なからず他のゴッドイーター達にも影響を与え
神機を扱う際にも大きく影響する…

整備班として神機をずっと見てきたリッカはそれがよく解っていた
サクヤ達を心配し考え込んでしまったリッカ…
その時…

『リッカさんっ！危ないっ！！』
「えっ！？」

上空から突然襲ってきたアラガミ ザイゴートの群れ…
リッカはヒバリの声でアラガミの存在に気づいたが
その一撃をかわしきれずにアラガミに背後から抱きつかれてしまった

「いやあああああつ！！！！？？？」

『リッカさんっ！？』

アラガミの襲撃に怯えるヒバリだったが…時は既に遅かった…
ヒバリの周囲には何体ものオウガテイル種が取り囲んでいたのだった

『そ、そんなっ…！??』

「いやあぁっ、離してっ！！！！??？」

飛行型のザイゴートに捕まり宙に持ち上げられたリッカ
その周囲には何体ものザイゴートがリッカを取り囲む…

「な…なんでっ…なんなのこれっ！！？」

リッカが何よりも驚いたのは
ザイゴートの体から伸びている
巨大な男性器を思わせる部位が伸びていたことだった
整備士として生きてきたリッカにとって男性との交際は無縁であった
男性器をこんなにも近くでみたことの無いリッカは思わず見とれてしまう…

「すごい…これ…っ…待って…なんでアラガミにこんなものがっ…！？」

すぐに冷静さを取り戻したリッカだったが動揺は隠せない
リッカの正面からはもう一体のザイゴートが近づき
その肉棒をリッカの秘部に力強く押し当て始めたからだった

「ひやっ…！??? えっ…まさか…それを…っ…！？」

アラガミ達の目的を理解してしまったリッカ…

「いやだっ…最初の相手がアラガミなんて…っ…！！？」

しかし…リッカの体温は上昇していった
襲われている恐怖と同時に、どこか期待している部分もあったのかもしれない
ザイゴートによりリッカの衣服は大きく引き裂け乳房が露出し
下着まで丸出しとなっていた…
その下着の上からザイゴートの肉棒が執拗に押し付けられると
リッカの下着はうっすらと湿り始める…

「ひうっ…！？ ダメだっ…こんなことダメだよっ…！！？」



しかし…

ザイゴートの肉棒はリッカの下着をかわし秘部へと密着…

そしてゆっくりと膣内へと挿入されていたのだった

「はぐうっっ!! ??????」

苦痛に顔を歪めるリッカ…しかし

背後から迫っていた肉棒の存在には気づいていなかった

リッカは驚きを隠せず
始めて挿入された2本の肉棒…

こんなにも膣内を激しく突き上げるその存在に目を丸くしていた
同時に襲う激しい痛みと瞳からは涙が溢れていたが
リッカにとっては肉体的な苦痛よりも精神的なショックの方が大きかったようだ

「はあっ…あぐう!!!??? うあああっ!!!????」

前後から激しく突き上げられるリッカ…
その両手はザイゴートの乳房をしっかりと掴み体を支えていた…

『いやぁ、来ないでっ!!!???』

必死にオウガテイルから逃げ回っているヒバリ…
しかし、オウガテイルはヒバリとの追いかっこをまるで楽しんでいるように
ヒバリの行く手を遮り背後へと回り込む

『はぁ…はぁ……っ!!!?』

ヒバリのタイツは逃げ回った際にあちこちが裂け生足が露になっており
スカートはいつの間にか下着が丸見えになるほどに捲れ上がっていた…
ヒバリ自身は全くその事に気づいていないほどに必死であった

ゴッドイーターの候補であるヒバリであったが
偏食因子の投与はされていない為、まだごく普通の人間であり
ゴッドイーターたちが見せる華麗な動きやスタミナとは無縁であった
すぐに疲れが見え始めたヒバリにオウガテイルは一気に飛びかかったのだった

『きゃあああああああっ!!!!???』

背後からオウガテイルに襲われ追い詰められたヒバリ…
その衝撃でバランスを崩したヒバリは壁際へと追い込まれていた
そして…

『いやぁっ…何をする気っ…!!!???』

オウガテイルに押され壁に両手を付いたヒバリ…
そんなヒバリの背後からオウガテイルは下半身を必死に押し付けてきていた
その動作はまさに交尾を求めている姿そのものであった

『嘘でしょ…まさかっ！？』

ヒバリがふと視線を落とすと…

そこには勃起し赤く膨れ上がったオウガテイルの肉棒があった

『きゃあああっ！！！？！？』

思わず悲鳴を上げるヒバリ…

逃げなくちゃ…頭の中ではそう考えていたが
恐怖で体はまったく動かなかったのだ

ヒバリがそうしている間にオウガテイルの肉棒は目標を定め
秘部へと肉棒を擦りつけていた…

『ひっ！！！！！？！？！？』

怯え涙を流すヒバリ…

そして…

肉棒は下着をずらしヒバリの膣内へと一気に挿入されたのだった

『あああ、あはああああああっ！！！？！？！？』

膣壁を刺激しながら奥深くへと挿入されていく肉棒…

『ひっ…ひあっ…ひぐうっ…！！！？！？！？』

全身を震わせ必死に激痛に耐えるヒバリ

涙と汗が滝のように流れ落ちる…

全身が苦痛と恐怖で震え悲鳴すら出ないほどであった



オウガテイルの肉棒は最深部にまで到達…ヒバリの子宮を大きく押し上げると激しく腰をふり彼女の体を大きく揺さぶったのだった

「うっあぁっ!!??? ひっ…あひっ…いっ!!!!????」

ヒバリは抵抗することもできずにただオウガテイルと交尾を続ける…

ヒバリはこの苦痛から逃れようと必死であった
耐え続け何とか逃げ出すチャンスを伺っていたが
全身に走る凄まじいほどの刺激に頭が回らない・・・
考えようとすれば考えるほどに頭の中は真っ白になっていく・・・

そしていつの間にかヒバリは考えることをやめていた・・・
抵抗せずオウガテイルの交尾が終わるのをただ待つ・・・
それが最も苦痛が少なく解放される術であると本能的に判断した

しかし、
頭の中が真っ白になると・・・
全身に感じる刺激に神経が向いてしまう・・・

『ひあああっ！！！！？？？』

そこで始めて気づかされた苦痛の中にある快樂・・・
オウガテイルの激しい攻めに感じている自分がいることに気づいた

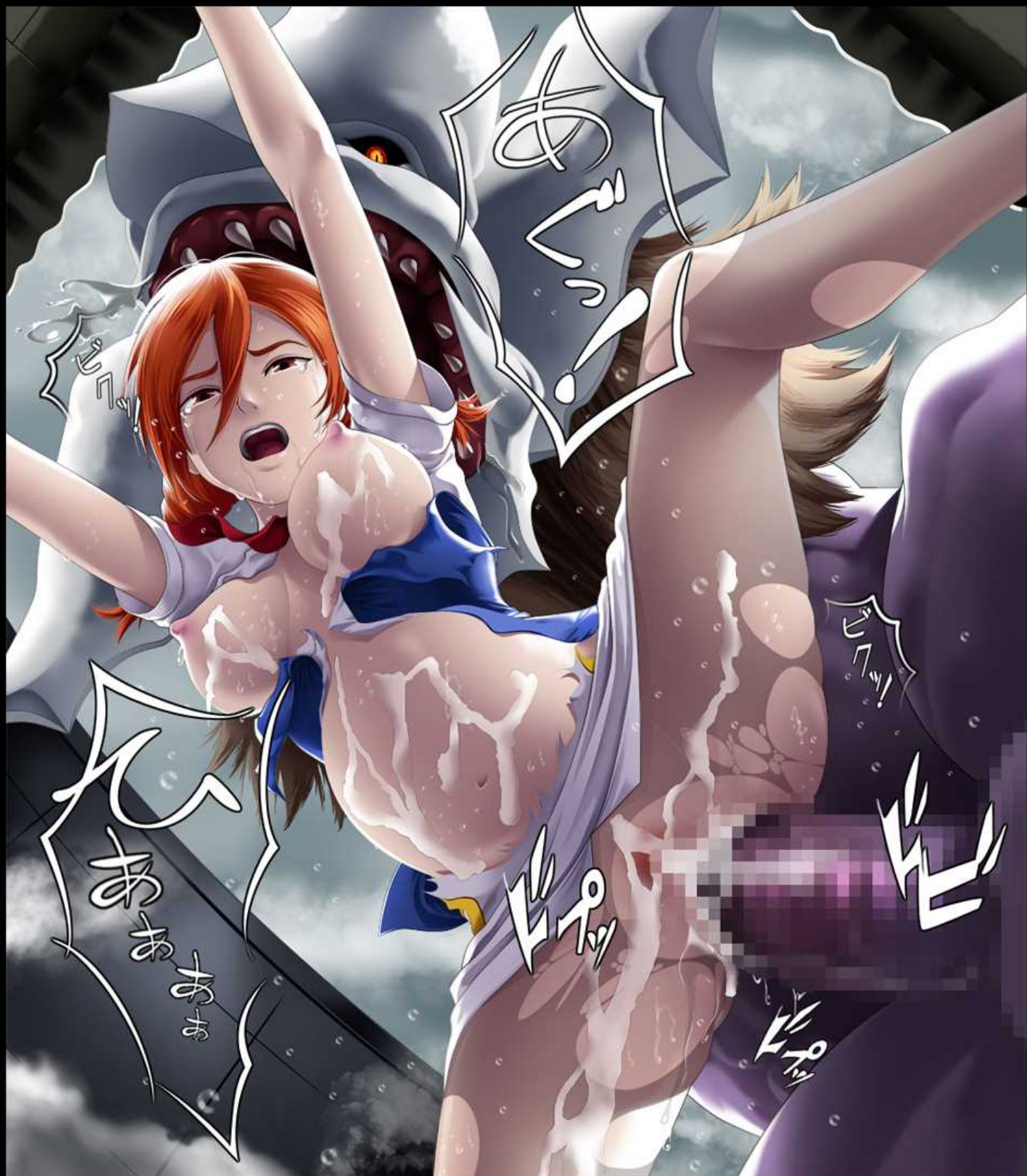
『そんなっ・・・私っ・・・！？？』

自分で自分のことが信じられなかった・・・
こんなひどい仕打ちを受けながらもどこかで楽しんでいる自分がいることに・・・

だが、同時に快樂に身を任せてしまうと非常に楽になることに気づかされる
ヒバリの体は自然と肉棒を拒絶していた・・・
それは僅かな姿勢の変化や精神的な面で現れていた
この苦痛から逃れたい一心で・・・
ヒバリは全てを受け入れようとその身を任せただった

『あああああああああああああああつっ！！！！！！！！？？？』

その瞬間・・・ヒバリの体は絶頂を迎えていた
全てを受けれたことにより全身に伝わった快感・・・



そして
オウガテイルの肉棒から大量の精液が射精されると
ヒバリの心は完全に墮落してしまったのだった…

『ひあああああああああああああああああああつっつ！！！！！！！！！！??』

全てを受け入れたヒバリはもう引き返すことができなかった
『あっ…あひっ……ひいっ……！！??』

大量の精液を受け入れ腹部がみるみる膨らんでいった
服は大きく引き裂け腹はまるで妊婦のように見える…
射精を終えたオウガテイルはゆっくりと後退し肉棒を引き抜いていく…

『ひあっ…ひっ…ひああああああっ！！！！??』

ヒバリの悲鳴と共に大量の精液が溢れ出す…
周辺に精液を撒き散らしながらヒバリは喘ぎ続けていた…

空中でサイゴートに揺さぶられ続けていたリッカにも
既に限界が見え始めていた
前後から激しく突き上げられリッカの意識は既に朦朧としていたのだった

「あっ…あがっ……うっ……！！！！??」

だが、リッカは信じていた…
必ず仲間達であるゴッドイーター達が助けにきてくれると…
それを信じることで苦痛を乗り切ることができていたのだ…

しかし…
宙に浮いているリッカだからこそ…遠くの状況までよく見る事ができた

「あっ…あれっ…はっ……！！？」

リッカの視線の先には
グボログボロの舌の上で喘ぐジーナ…
シュウに捕まりうっとりとした表情のカノン…
コンゴウに肉棒を突き立てられるサクヤ…
そして、ヴァジュラと肉棒で繋がり叫ぶアリサ…
頼りにしていたゴッドイーター達の無残な姿であった

「そ…そんな…私どうすればっ！？」

リッカの顔はさらに絶望の色が強くなった



そして...

ザイゴートの肉棒から大量の射精が開始されるのだった
「あっ...熱いっ...出てるっ...何か出てるっっ!!!????」
子宮に溢れていく熱い液体にパニックになるリッカ

そして、

射精を終えたザイゴート…

「あっ…ああっ……あっ……。」

大粒の涙を流しながらリッカは完全に放心していた…

さらに

ザイゴートの肉棒が引き抜かれると

大量の精液が逆流しリッカの2つの穴から大量に噴出したのだった

「ひぎiiiiiiiiiiiiiiiiっつ！！！！????????」

リッカは大声で悲鳴を上げた…

激しい排泄を終えたリッカの表情はどこか

うっとりとしているようにも見える…

リッカの元にはすぐに違う個体のザイゴートが近寄り…

その膣内に肉棒を挿入する…

ヒバリは既に他のオウガテイルの肉棒を受け入れ喘ぎ声を上げていた…

…アナグラ研究室…

「これは…まずい状況だね…ツバキ君…。」

「まずいなんてもんじゃ…ありません…。」

モニターに映る犯され続ける極東支部の仲間達…

それを困惑した表情で見つめるサカキ博士と指揮官ツバキ

「彼らを救出しようにも…ゴッドイーターは全て出払っています…。」

「……打つ手がない…わけだね…。」

「…はい……。」

何もできない状況に苛立つツバキと…

何とか状況を打開しようとするサカキ博士

「…私は…ひとまずこの映像が出回らないように手を回すよ…。」

「……支部長には…？」

「……例え支部長であろうと…見せる必要はない…

新種のアラガミに対する報告は…しなくてはいけないけどね…。」

「……。」





EPISODE 06

アナグラの女たち

EPISODE 06

極東支部がアラガミの襲撃にあってから一週間が過ぎていた…

アラガミたちに弄ばれた女達の体力の消耗は激しかったが十分な治療を受けたために全員が現場へと復帰していた

あの日…女たちを襲っていたアラガミが突然襲撃を止め引き返した…

その原因はまだ解っていないがサカキ博士の推測では…生物の交尾を模倣しているアラガミがその性欲を満たしたことで満足して帰ったのではないかと…

または射精によりエネルギーを消費しすぎたアラガミ達が捕食するために餌場へと戻っていったのではないかと…など様々な憶測がされていたがまだ結論は出ていないのだった

サカキ博士とツバキにより、ゴッドイーター達の哀れもない姿はデータ上から消去され記録には一切残されてはいない…当日の映像も博士が咄嗟に妨害した為に職員で映像を見たものはいない

市民の中には一部目撃してしまった人物がいるようだったが極東支部フェンリルの恩恵を受け暮らす人々は決して語ろうとはせず固く口を閉ざしていた

しかし、フェンリル本部やシックザール支部長には新種のアラガミの発見を報告しないわけにはいかない…

サカキ博士は被害にあったゴッドイーターたちを気遣い彼女達に影響が無いように最低限…必要な報告を行った…

「サカキ博士…今回はありがとうございました。」

「いいんだよツバキ君…彼らはいつも我々を守ってくれているんだからね。」

フェンリル全体で新種のアラガミに対する対策が対応されることになったが
幸いにもゴッドイーター達の名誉は保たれる結果となった

「しかし…気になるのはツバキ君とリッカ君のケースだね…。」

「と…いいますと？」

「偏食因子を持たない彼女達までアラガミの被害にあっている…。」

「それは…まさか…？」

「うん、被害はさらに拡大する可能性が高い…何とかしないとね。」

「……………」

「はぁ…。」

「ちょっと…いつまで落ち込んでるのよサクヤ…。」

一週間が過ぎ何とか立ち直ったジーナと
未だに落ち込んでいる様子のサクヤ

「仕方ないでしょ…あなたこそ立ち直りが早いわね…？」

「悩んでも仕方ないわ…次は必ず返り討ちにする…。」

「…………リッカとヒバリはまだ病室…？」

「ええ…あの子たちは私たちに比べて回復に時間がかかるのよ…。」

偏食因子を持たない二人はまだ病室から出られずにいた…
といっても肉体的な問題ではなく
精神的な面でサクヤより落ち込んでいるのが原因であった

アラガミと普段戦うことの無い彼女たちにとって
想像を超えたショックの連続だったようだ…

「あ、アリサさん遅いですよっ！」
『ごめんなさいカノンさん…。』

神機を構え任務へと向かうアリサとカノン…

「では行ってきますね！」
『…行ってきます…。』
二人の様子は以前と変わらないようだった

「…あの子たちは本当に元気ね…。」
「ええ…不思議なくらいね…。」

「おい、一体何があったんだ…？」
「いえ…俺は何も…。」
「お前いつもそれだな…本当は知っているんだろ？」
「いいえ、何も知りません！！」

激しく落ち込むサクヤ ジーナ達と
落ち込んでいたがすぐに立ち直ったアリサとカノン…
そんな彼女たちを眺め語るリンドウとユウ…

特に落ち込んでいるサクヤ達を強く心配するリンドウであったが
何も語ろうとしない彼女達やユウの反応から深く追求はしなかった
「とはいえ…気になるよなあ…。」

「…この間まではこの辺にいたんですけどね…？」
『ええ…この辺りが彼らの縄張りで間違いはないはずです。』

極東支部からそう遠くない、とある廃墟の前で何かを探すアリサとカノン
周囲を見渡し、念入りにその痕跡を探っていた…

「ああ、あそこにいましたよっ！！」
『……そうですね……本当にまた行くんですか？』
笑顔のカノンに対して、どこか複雑な表情を浮かべるアリサ
「いいじゃないですか、さあいきましょう！！」

そこにいたのはオウガテイルの群れ・・・
カノンはその群れに恐ることもなく近づいていく・・・

「やっぱり、この子達ですよ・・・目が違いますもん！」
「うん・・・そうでしょうか・・・あまり違いが解りませんが。」

オウガテイル達もカノンとアリサを警戒している様子はない・・・
むしろ彼女達との再開を喜んでいるようにも見える・・・

「あっ・・・焦らないでっ・・・そうゆっくり・・・！！」
自ら足を広げオウガテイルの肉棒を受け入れるカノン・・・
「あはっ・・・入ってきた・・・これ・・・この感覚よっ！！！」
「……………」



偏食因子との適合率が高いカノンは
ひどい興奮状態になると言葉遣いが大きく変貌することがある
以前の大人しい様子とは違い激しく肉棒を求める女へと変貌していた
そんな彼女に毎度だが言葉を失ってしまうアリサ…

『あっ…ちょっと押さないでくださいっ！』
背後から近づいてきたオウガテイルが交尾をせがむようにアリサを押し…

『……もう…仕方ないですね…。』

既に勃起したオウガテイルの肉棒を見たアリサは
服を脱ぎ自ら尻を突き出す…

『早く…ちょうだい……。』
オウガテイルは激しく興奮した様子でアリサの膣内へと肉棒を挿入する…
『はあああつああああん！！！！？？？？』

極東支部襲撃事件で負った心の傷を癒す為に
回復した後すぐに任務を求めたアリサとカノン…
辛い体験を忘れるためには任務に没頭するしかなかったのだった

そして二度とあんな辛い想いをしない為に強くなろうという決意もあった
上層部も最初は女性だけの任務に危険を感じ難色を示していたが
支部周辺の任務という条件付きでこれを了承した

周辺には強力なアラガミがない為に
アリサとカノンも二人で十分に戦うことができたのだった…

しかし、

偶然にも遭遇してしまった新種のアラガミの群れ…
その瞬間…アリサとカノン体内の偏食因子が騒ぎ始めた…
全身が熱くなり高まる性欲を抑えきれなくなった二人は
僅かな間…オウガテイルの群れにその身を捧げ交尾を繰り返してしまった

アナグラに帰還した後、その軽はずみな行動を恥じた二人だったが再び出撃した際に同じ場所で二人を待っていたオウガテイルの群れ…以前と同様に気持ちを抑えきれなかった二人は再び肉体を捧げた…

そして今回…

アリサとカノンはオウガテイルとの交尾を目的として出撃していた

全てを忘れて身を捧げ楽しむ二人…

その時間はあっという間に過ぎていき…

そこには全身が精液で塗れ変わり果てた二人の姿があった

「あっ…ああっ……。」

「あうっ……はあっ……あっ……。」





放心する二人だが、その表情はどこか満足気に見える…
溢れる性欲を思いのまま満たすことができた為だろうか…
その姿はかつてのアラガミと戦うゴディーターとはまるで違った

その後もアリサとカノンの秘密の任務は続いた…

「変種」と呼ばれるようになったそのアラガミと交流を続けた結果
その後、変種による被害は一気に減少したのだった
基本手と能力的な違いは無い変種の多くがゴッドイーター達に狩られたことが

一番の要因と考えられたが
一部の変種をアリサとカノンが手懐けた事が影響しているとは
誰も知らない…

変種以外の相手には以前と変わりなく戦い続けるアリサ…
大車の治療もあり辛い経験を忘れ
以前よりも遥かに強くなったかに思えた…

しかし…

リンドウを見るたびに…なぜか湧き出る怒りと憎しみ…
理由もなくいつしかリンドウを避けるようになっていたアリサ…

その感情は…
再びディアウス・ピターと出会った時に爆発することになる…

END





この度はサークル「DEEPRISING」の作品を御購入頂きありがとうございます！

当CG集に含まれる画像の無断転載 加工を禁止します。

当作品には 基本20枚 差分総数125枚 6のショートストーリーが含まれています。
感想ご意見などがありましたら HPのほうへお願い致します。

<http://deeprising.sakura.ne.jp/>